

報道各位

2026年10月22日
株式会社インプレス

AI 開発、雑にやると死ぬ！

『実践 AI 駆動開発 壊れにくいコードを生むための設計者思考』発行

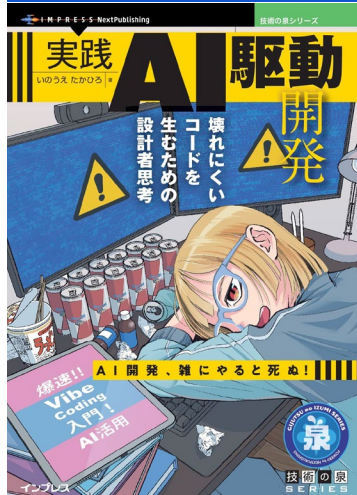
技術の泉シリーズ 10 月の新刊

インプレスグループで IT・デザイン関連メディア事業を展開する株式会社インプレス(本社:東京都千代田区、代表取締役社長:高橋隆志)は、『実践 AI 駆動開発 壊れにくいコードを生むための設計者思考』(著者:いのうえ たかひろ)をインプレス NextPublishing より発行いたします。

最新の知見を発信する『技術の泉シリーズ』は、「技術書典」や「技術書同人誌博覧会」をはじめとした各種即売会や、勉強会・LT 会などで頒布された技術同人誌を底本とした商業書籍を刊行し、技術同人誌の普及と発展に貢献することを目指します。

『実践 AI 駆動開発 壊れにくいコードを生むための設計者思考』

<https://nextpublishing.jp/isbn/9784295605454>



著者:いのうえ たかひろ

小売希望価格:電子書籍版 2,000 円(税別)／印刷書籍版 2,200 円(税別)

電子書籍版フォーマット:EPUB3

印刷書籍版仕様:B5 版／カラー／本文 134 ページ

ISBN:978-4-295-60545-4

企画編集:合同会社技術の泉出版

発行:インプレス NextPublishing

発売:株式会社インプレス

発売日:2026 年 10 月 23 日

<<発行主旨>>

AI 時代の開発において、コード生成 AI の普及により実装速度は飛躍的に向上しました。しかし、その一方で設計や要件定義が疎かになり、プロジェクトが崩壊するリスクも高まっています。本書は、AI を使いこなしながらも「壊れないシステム」を構築するための、人間側の責任と設計技術を徹底解説した一冊です。AI が危険なのではなく、人間の雑な設計や運用が失敗を加速させます。本書では、具体的な「発送完了通知の改修」という事例を軸に、要件定義から実装、そしてリリース後の運用まで、各工程で決めるべき判断基準を明確にします。AI に丸投げするのではなく、適切な文脈を渡し、出力を正しく評価するための「設計者の視点」を養うことができます。現場で即座に活用できるプロンプト例やチェックリストも豊富に掲載されており、実務における AI 活用の解像度が格段に上がるはずです。AI を強力な相棒に変え、技術的負債を積み上げないための本質的な開発力を身につけましょう。

(インプレス NextPublishing は、株式会社インプレス R&D が開発したデジタルファースト型の出版モデルを承継し、幅広い出版企画を電子書籍＋オンデマンドによりスピーディで持続可能な形で実現しています。)

<<目次>>

著者の言葉

はじめに

第 1 章 まずはアクセル全開で事故れ

第 2 章 AI 開発は、なぜ死に向かうのか

第 3 章 AI と技術者倫理

第 4 章 AI に嘘をつかせない技術

第 5 章 AI を使う前の事前準備

第 6 章 AI 以前に必要な開発知識

第 7 章 AI の車輪の再開発

第 8 章 開発前に考えること

第 9 章 AI のコードをレビューする

第 10 章 AI とチーム開発

第 11 章 開発後を想定しておく

第 12 章 AI 時代の原理原則

おまけ 僕の簡単プロンプト集

それでも AI で開発するなら

おわりに

あとがき

奥付

<<著者紹介>>

さらに、Git 運用などの調査項目を整理し、事前準備チェックリストを用いて土台を整える方法を説明しています。

第9章 AI のコードをレビューする

AIは大量のコードを一気に作成します。この章では、その速さに引きずられず、構造、責務、差分単位、条件分岐、巨大ファイル化の観点からレビューする方法を整理します。

AIコードレビューは、**行数を削って読む作業ではありません。**

図9-1 AIコードレビューの観点

AIコードレビューの観点	
観点	先に考えること
目的	変更目的も大で読解できるか
読解	状態管理、処理、制御などが読まれているか
読解	読めてよい読解も読んでいるか
確認	正誤、責務、制御確認を確認するか
読み方	どの単位でローカルバタか

9.1 この章でできるようになること

- AIコードを全部読もうとして疲弊する理由を説明できる
- 行数単位ではなく構造単位でレビューする観点を持てる
- 巨大ファイル化や条件分岐の増減を早い段階で止められる
- 理解できないコードをマージしない判断基準を持てる

9.2 前提

- Gitを使ったレビュー経験があること
- 責務分岐やモジュール分割の基本感覚があること

この前提が必要な理由は、本書がコーディング作法ではなく、レビューで何を止めるかを扱うためです。差分と構造の感覚がないと、見た目の悪い方へ引っ張られてしまいます。

9.3 AIコードを全部読むのが無理になる理由

AIは人間より速く、しかもそれらしい形コードを増やします。そのため、行数を犠牲で追うレ

ビューはすぐ読解します。

- もっもらしい命題で、違和感を感じる
- 見慣れた共通記号で、違和感に気づきにくい
- 差分が大きいと、重要な行が埋もれる
- 条件分岐が増えたら、単体では読めてしまう

問題は、AIコードが必ず正しいことではありません。人間がレビュー可能な量と読解を超えやすいことです。その問題を克服するため、レビューは高品質ではなく作りになります。AIに任せると、AIが出した差分も人間が判断できる大きさに戻す必要があります。

AIを使っていると、複雑なタスクと同じバタを別セッションでも繰り返すことがあります。そのときレビューがコードの見た目にだけ寄っていると、「前回も止めるべきだった構造」をまた通してしまいます。

9.4 コードではなく「作り」を見る

レビューで見えるべきなのは、1行ごとの行単位ではなく構造です。責務、境界、影響範囲、ローカルバタ、確認範囲の揃っている差分は、見た目がきれいでも危険です。

図9-2 コードではなく「作り」を見る

AI CODE REVIEW コードではなく「作り」を見る	
観点	先に考えること
読解	1つの単位が何を実現しているか
読解	どこまでを変更しているか
条件分岐	分岐が何を実現しているか
ローカルバタ	どの単位でローカルバタか
確認	何で変更を確認したか

レビューは「全部理解してから判断する」のではなく、「危険な構造を先に見つけて、そこで止める」ための作業です。

9.5 危険な構造を先に止める

9.5.1 構造レビューを先に行う

- 差分を読む前に、変更目的を1文で書けるか確認する
- 動いているファイル数と変更の箇所が揃っているかを見る
- 既存機能への副作用がどこに当たるかを先に確認する

100 | 第9章 AI のコードをレビューする

NextPublishing Sample

NextPublishing Sample

AI のコードをレビューする | 101

構造と責務で AI コードの品質保証を実現する

第 9 章では、AI が生成する大量のコードを行数で追うのではなく、構造や責務、差分単位、条件分岐、巨大ファイル化の観点からレビューする方法を整理します。危険な構造を先に見つけて止め、理解できないコードはマージしないという判断基準を持つことで、品質保証として機能するレビューを実現できます。

第12章 AI時代の原理原則

原理原則は暗記項目ではありません。この章では、AI活用で迷ったときに使える判断装置として原理を再定義します。実行、実行、運用の原則。ここでは原理、原則へ応用します。

図12-1 AI時代の原理原則

PRINCIPLES
この章で説明すること

目的、目的、目的などの原則を、AI時代の判断装置として使い直します。

原則名を定義せずに、何の失敗を防ぐための判断軸がまだ定義へ戻す。	設計判断への接続 DRY、KISS、YAGNIを、実行、責任分け、運用条件へ結びつける。
正確な知識 原理原則、過去の失敗を思い出して目的や原則を一つとして読む。	文脈付き指示 原理原則だけでなく、具体的な指示、運用条件、例外条件、レビュー基準まで書く。

要約：原理原則は暗記ではなく、AIの理解を止めないための判断装置にする。

12.1 この章で説明すること

- 単純化の原理
- DRY (Don't Repeat Yourself)
- 同じ知識を複数箇所へ散らす。変更漏れを減らす。
- KISS (Keep It Simple, Stupid)
- 一機能を範囲にします。また、読める設計を守る。
- YAGNI (You Aren't Gonna Need It)
- 未来のための仕組みを先回りしすぎず、今必要な範囲で止める。
- 責任分けの原理
- SOP (Single Responsibility Principle)
- ひとつのモジュールはひとつの責務に集中させる。
- SoC (Separation of Concerns)
- 一機能を分けて、変更時の影響範囲を小さくする。
- 責任性と明示の原理
- Fail Fast
- 一問題を早く表面化させ、隠れて壊れる状態を防ぐ。
- Idempotency
- 一回し操作を複数回実行しても、1回実行した場合と同じ結果になる性質。エラー返却などの外部副作用には、失敗返却を防ぐ仕組みが必要になる。
- Least Attachment
- 一読み手が予想しやすい手順を優先する。
- Explicit is Better than Implicit
- 暗黙より明示を優先し、暗黙を減らす。

原理原則は、長い失敗経験から長い言葉へ変化したものです。ただ、見られた名詞のみに従うと、DRYは強制最適化、YAGNIは必要なロジック、KISSは責任分けを減らす単純化として誤用されることがあります。だから原理原則だけで判断せず、今回読みたい失敗を運用範囲まで戻して使います。

図12-2 DRY、KISS、YAGNIをAI時代の判断装置として整理した流れ

PRINCIPLES STAGE
基本原理の流れ

責任を分ける • SoC • SOP	複雑さを抑える • KISS • 必要なら範囲だけDRY	壊れ方を制御する • Fail Fast • 意図性
--------------------------	------------------------------------	----------------------------------

責任分けが他にあり、その上で複雑さを抑え、最後に失敗時の挙動を制御する。順序を逆にすると設計が読める。

100 | 第12章 AI時代の原理原則

NextPublishing Sample

NextPublishing Sample

第12章 AI時代の原理原則 | 101

迷った時の判断装置として原理原則を再定義

第 12 章では、AI 活用で迷ったときの判断装置として原理原則を再定義します。標語のまま使う誤りを回避し、文脈を重視した判断軸を示します。運用の判断を原理へ圧縮する方法を説明します。過去の試行錯誤や失敗を短い言葉へ畳んだものと捉えます。デザインパターンやテスト戦略を選ぶ際の基準となる役割を解説します。

<<販売ストア>>

電子書籍：

Amazon Kindle ストア、楽天 kobo イーブックストア、Apple Books、紀伊國屋書店 Kinoppy、Google Play Store、honto 電子書籍ストア、Sony Reader Store、BookLive!、BOOK☆WALKER、BOOK TECH

印刷書籍：

Amazon.co.jp

※ 各ストアでの販売は準備が整いしだい開始されます。

※ 全国の一般書店からもご注文いただけます。

<<技術の泉シリーズについて>>

『技術の泉シリーズ』は、技術者の知見のアウトプットである技術同人誌を底本とした、2017 年創刊の技術書シリーズです。NextPublishing によるスピーディな編集制作とプリントオンデマンドによる 1 冊からの印刷製本により、技術の変化に追従しつつ返品や品切れのないサステナブルな出版モデルを特徴としています。本シリーズを通じて、エンジニアの“知の結晶”である技術同人誌の世界に、より多くの方が触れていただくきっかけとなることを目指しています。



【株式会社インプレス】 <https://www.impress.co.jp/>

シリーズ累計 8,000 万部突破のパソコン解説書「できる」シリーズ、デザイン・グラフィック関連の書籍ブランド「MdN」、「デジタルカメラマガジン」等の定期雑誌、IT 関連の専門メディアとして国内最大級のアクセスを誇るデジタル総合ニュースサービス「Impress Watch シリーズ」等のコンシューマ向けメディア、「IT Leaders」をはじめとする企業向け IT 関連メディアなどを総合的に展開・運営する事業会社です。IT・デザイン関連出版メディア事業、およびデジタルメディア＆サービス事業を幅広く展開しています。

【インプレスグループ】 <https://www.impressholdings.com/>

株式会社インプレスホールディングス(本社：東京都千代田区、代表取締役：塚本由紀)を持株会社とするメディアグループ。「IT・デザイン」「音楽」「山岳・自然」「航空・鉄道」「モバイルサービス」「学術・理工学」を主要テーマに専門性の高いメディア＆サービスおよびソリューション事業を展開しています。さらに、コンテンツビジネスのプラットフォーム開発・運営も手がけています。

【NextPublishing】

NextPublishing は、インプレス R&D が開発した電子出版プラットフォーム(またはメソッド)の名称です。電子書籍と印刷書籍の同時制作、プリント・オンデマンド(POD)による品切れ解消などの伝統的出版の課題を解決しています。これにより、伝統的出版では経済的に困難な多品種少部数の出版を可能にし、優秀な個人や組織が持つ多様な知の流通を目指しています。

【本件に関するお問合せ先】

株式会社インプレス : PubX 室

E-mail: np-info@impress.co.jp